

患者・障害者への介助を通して理学療法士の行動変容を考える  
～ 応用行動分析学を用いて～

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
安達 知広

本研究では、理学療法士（以下 PT）を研究対象者とし、臨床の場面で患者・障害者（以下患者）に対して行う社会的賞賛や患者の自発性や自己選択に対する理解度を数値化し、トリートメント（以下 TR）による増加を目的とした。TR には応用行動分析学理論を導入し、得られた結果を障害観を考える材料とした。同時に研究前後に記述式のアンケートも施行した。

具体的な研究観察記録として対象者が患者に対して発言する声かけの数「正の強化」の変化、患者の動作開始から対象者が介助に入るまでの時間「待ち時間」の推移の変化、またセッション中の患者の表情を記録してその変化をみた。

これらの効果を分析するために、実験デザインとしてチェンジングコンディションデザインを使用した。記録は、ベースラインフェイズ（以下 BL）後の間をあけて TR1 施行後 3 セッション、TR2 施行後 3 セッション、その後 4 セッションをフォローアップとして施行した。

独立変数には、応用行動分析学の基礎について、約 40 から 60 分でスライドを用いて筆者が各対象者へ講義を施行した（TR1）、また各対象者が各患者への理学療法・介助施行場面を記録したものを筆者および対象者より経験年数が豊富な PT が SV となり各対象者へできるだけ多く社会的賞賛を入れるようにフィードバックを施行した（TR2）。

従属変数には、主に正の強化の数、待ち時間の増加を分析した。観察・記録に関しては、デジタルビデオを使用しインターバル記録法にて筆者が抽出記録した。

その結果、対象者の正の強化を平均値で見ると、TR1 施行後期間および TR2 施行後と BL と比較して生起率が高いという結果が得られた。

また各対象者における患者の待ち時間推移については、各対象者における各患者の待ち時間の平均値で見ると TR1 施行後および TR2 施行後と BL と比較して待ち時間が長いという結果が得られた。

患者の表情の変化については、各患者において、患者 1、患者 2 とも「笑顔」より「普通」の表情が多く、またいずれも「険しい」の表情は「笑顔」、「普通」の表情よりも少ない結果が得られた。理学療法・介助場面記録フィードバック後のアンケート結果についてはポジティブな記述とネガティブな記述の両方見られたが、フィードバック時に SV が対象者に正の強化を十分入れ施行したこともあり、会話中に笑顔が多く、自らの介助場面を閲覧し、しっかりと出来ていることにはうなづく場面や表情も悲観的ではなく前向きな意見も多く見られた。

研究前後アンケート結果については、研究前と比較し研究後では平均 23.5 点で平均 2 点の増加が示された。また「患者の笑顔が増え、リハビリテーションに意欲的になることについてあなたはどのように感じていますか」の質問に対し対象者 1 は「少しは考える」へ、対象者 2 では「とても嬉しい」へと変化した。

これらの結果から、今回の TR1 で施行した講義や TR2 での内容がすべて伝わりセラピストが行う発言動作が 180 度変化したとは言えないが、声かけや待ち時間の増加などの変化による、ある程度のいわゆる行動変容が起こったことが今回の研究において示された。

患者全体をみて自発性や自己選択をさせる環境を作っていくという、今までと違う「行動をみる」視点から患者を捉えるきっかけになったと考えられた。